

書評

林田敏子著

『戦う女、戦えない女—第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』

(人文書院、2013年)

小野寺 拓也



今年、第一次世界大戦開戦百周年に当たる。ヨーロッパ社会にとって第一次世界大戦は、近代から現代への画期をなす決定的な転機であった。すなわち、前線における決戦で決着がついたそれまでの19世紀的な戦争とは異なり、「銃後」の軍需経済、労働動員、食糧統制、プロパガンダによる戦意高揚など、すべての国力を戦争に投入する「総動員体制」が各国で構築されるようになった。これにより「夜警国家」から、経済生活、社会のあらゆる場面への介入が行われる「大きな国家」「干渉国家」へと、国のかたちが大きく変貌を遂げたのである。そのさい戦争遂行に国民各層の幅広い協力が

不可欠となったため、戦争協力への見返りとして、女性や労働者階層など、それまで社会の周辺的な存在とされてきた人びとの政治参加の拡大や民主主義化、反対給付が進んだ。第一次世界大戦は、社会国家（福祉国家）という現代社会の原点になった。

こうして第一次世界大戦に端を発する総力戦体制は、戦車や航空機、毒ガスといった新兵器の登場、塹壕戦において機関銃や砲弾によって生じる著しい死傷率など、「原破局 Urkatastrophe」と言えるような未曾有の惨禍をもたらす一方で、社会の平準化、民主化、人びとの政治参加を促す側面をも持っていた。総力戦体制がもつこうした両義性を、女性もまた別の形で体現している。本書で指摘されているように、戦争ほど「性差」が絶対視される局面はない。「戦いに勝つことがすべてに優先する社会では、武器をとって戦う者こそが価値をもつからである」（本書10-11頁）。「戦う性」である男性と、「戦わない（戦えない）性」としての女性の間の、「超えられない壁」。しかしその一方で、実は総力戦体制ほど「性差」が動揺する時期もない。成年男性の多くが兵士として前線に送られ、それまで男性が果たしていた役割を女性が果たさなければいけなくなるからである。第一次大戦中には、軍需工場での労働、トラムやバスの車掌、鉄道会社のポーターや警備員、切符回収、郵便配達など、それまで女性の参入が認められなかった分野も含め、幅広い職域へと女性が進出していった（14頁）。そうした中で「カーキ・フィーバー」という、若い女

性が制服を着る兵士たちに熱狂する現象が起きることになる。たとえ軍隊に入れないとしても、何らかのかたちで制服を着て社会に進出したいと願う女性たち。本書はそうしたジェンダー秩序を根本から揺り動かしかねない女性たちも含めて、第一次大戦期のイギリス社会におけるジェンダーとセクシュアリティを概観するものである。

第1章「戦いを鼓舞する女」は、戦場に赴くよう男性たちを叱咤激励する女性たちを取り上げる。募兵ポスターにおいて女性には、娘、妻、母として、父や夫、息子たちに武器を取るよう迫る役割が与えられた。さらにはポスターという架空の世界だけではなく、実際に街頭で「白い羽運動」という募兵活動を行う女性も現れた。これは、道行く男性に対して「なぜあなたは自分の任務を回避しているのですか」などと語りかけ、「臆病者」の印として白い羽を渡すという運動である。

第2章「ベルギーの凌辱」は、男性たちに武器を取らせるために、ドイツ軍による女性への残虐行為がいかに政治利用されたのかを追う。ポスターではドイツ兵の残虐さが直截的なタッチで描かれ、志願や戦時公債購入が呼びかけられた。「ブライス報告書」では、ドイツ軍兵士による虐待や虐殺、「人間の盾」作戦などが、ベルギー難民やイギリス兵の証言に基づいて、おそらくはかなりの誇張を含んだ形で描写された。イギリス人看護婦イーディス・カヴェルはそうした状況のなかでベルギーに踏みとどまり、英仏負傷兵の看護に当たったが、ドイツ軍に逮捕され死刑に処せられる。イギリスはこれを最大限に政治利用し、ロンドン主教が出席する追悼礼拝が行われ、首相が議会で演説し、募兵や戦時公債購入キャンペーンのポスター、絵はがきなどで彼女がモチーフとして使われた。

第3章「愛国熱と戦争協力」では、「銃後」における女性の戦争協力のありようが描かれる。19世紀半ば以降始まった女性参政権運動は、大戦勃発直前にはピークに達していたが、大戦が始まると活動休止が宣言され、かわりにおびただしい数の女性ヴォランティア組織が創設された。そうした流れのなかで、「女性警察ヴォランティアーズ」「ヴォランティア女性パトロール隊」という二つの女性警察がつくられ、参政権運動に参加していた多くの女性を惹きつけることになる。大戦前までは「男の聖域」であった警察だが、「女性警察ヴォランティアーズ」は、「戦後も継続的に雇用される」ことを約束し、隊員は警察のシンボルカラーである青を基調としたそろいの制服を着用した。彼女たちは公園やパブ、ミュージックホールや映画館、簡易宿泊所などを見回り、「風紀の乱れ」に対するモラル・コントロールを行った。つまり彼女たちの活動とは、警察が立ち入ることができない人びとの日常生活へと介入し干渉するものであった。とくに夫が出征した妻の暮らしぶりに対しては、厳しい監視の目が向けられた。また農業分野でも、労働力不足から女性農耕部隊が創設されたが、彼女たちも制服を着用していた。給与は低かったが、制服が女性に与える解放感にはそれを補うのに十分なものがあつた。

第4章「『戦う』女たち」では、赤十字部隊やヴォランティア救護部隊のような救護活動のための組織だけではなく、戦闘行為を直接補佐する女性組織について論じられる。「女性ヴォランティア予備軍」は、戦場での物資輸送や車両の運転などを含み、それまで男性

が担ってきた非戦闘任務を担当した。制服を着用するだけでなく、上は連隊長から下は新兵まで軍隊式の階級名が与えられ、幹部に対しては敬礼をし、「サー」をつけて呼ぶことが義務づけられ、軍隊式の行進や教練が積極的に行われるなど、軍隊化を強く志向する集団であった。その後1917年に発足した「陸軍女性補助部隊」では、洗濯や掃除、調理、事務など、それまで女性に割り振られてきた役割の仕事が多かったが、そもそも家庭という「本来の居場所」を捨てて軍隊の中で働くということ自体が画期的であったし、ここでもバッジの着用や「サー」に代わる「マダム」という呼称など、軍隊の規律が重視された。しかしこうした女性たちに対する社会（男性だけでなく女性からも）の視線は厳しいものがあつた。彼女たちの性的モラルの「低さ」が実際以上に誇張されて噂として広まり、伝統的な性役割を「越境する女」に反発する女性からの投書が数多く新聞に寄せられた。こうした女性が軍隊に存在することで「戦う男」のマスキュリティが傷つけられないよう、上層部も細心の注意を払っていた。こうして一見、第一次大戦によってそれまでのジェンダー役割が動揺したように見えながらも、女性が足を踏み入れることのできない「男の聖域」は守られなければならないという価値観自体が実際に破壊されることはなかったと、著者は指摘する。

以上のように本書を通読してまず感じるのは、著者の優れたバランス感覚である。周知のようにフェミニズム運動には、「平等と差異のパラドクス」とでも言うべき苦悩がある。男性との平等を追求すると、それまでの伝統的な性役割をアイデンティティのよりどころとしてきた男女双方から強い反発を招く上、本書でさまざまに見てきたように国家権力／暴力の担い手としての貢献を求められることになる。かといって「女性にしかできないことがある」と「女性らしさ」を前面に押し出すと、伝統的なジェンダー秩序へと容易に絡め取られやすい。しかしこれは「ヘゲモニー的男性性」(R・コンネル)、すなわちその時代において男性が担うべきとされる社会的役割が「社会標準」となっていることが、そもそもの原因であろう。「ヘゲモニー的男性性」を受け入れ実行できる男女のみが社会において「場」を与えられ、それ以外の人びとは周縁的な立場に置かれるという状況。男性基準でもなく女性基準でもない、より「ニュートラル」な何かを基準に設定しなければ、この問題を解決することはできない。そのためには、唯一の「正解」が存在しない中で人びとはこれにどう向き合いどう行動してきたのか、過去の歴史主体の歩みから忍耐強く読み解いていく作業も必要になるだろう。本書はまさにそうした冷静な視点に貫かれており、女性内部の意見対立など、決して一枚岩ではない複雑で多様な女性のありようを捉えることに成功している。

もう一点指摘できるのが、ポスターや写真など豊富な図像史料が利用されていることである。戦時下のプロパガンダにおいて、女性という表象がいかに政治利用されたのかを具体的に理解することができるし、様々な組織で活動する女性たちの姿が写真を通じて生き生きと伝わってくる。また、回想録や手紙、新聞への投書といった「エゴ・ドキュメント」の多用も印象的である。ジェンダー秩序という全体構造だけでなく、歴史の細部をお

ろそかにしないこうした記述によって、女性たちは第一次世界大戦という大状況によって規定される「客体」であっただけでなく、自分なりの思惑や理想を持って状況に立ち向かう「主体」でもあったことを、読者は感知することができる。イギリス史や第一次世界大戦という狭い文脈だけでなく、ジェンダー史全体を考える上で欠くことのできない著作であろう。

(おのぞら たくや 歴史文化学科専任講師)